

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年6月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学部附属病院 消化管外科

職 名・学 年 助 教

氏 名 肥 田 侯 矢

助成の種類	平成27年度 ・ 研究者交流支援 ・ 国際研究集会発表助成／一般		
研究集会名	第116回 米国結腸直腸外科学会議		
発表題目	腹腔鏡下直腸癌手術 局所再発関連因子の探索 A new prediction model for local recurrence after curative rectal cancer surgery		
開催場所	米国マサチューセッツ州ボストン		
渡航期間	平成27年 5月30日 ～ 平成27年 6月 3日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	渡航費	292,300 円
		学会参加費	85,000ドル (102,000円)
上記に充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回は、渡航直前でしたが、助成をいただき、迅速な対応で大変ありがたく思っています。9月や10月の学会(Acceptが6月以降のもの)に関しても、助成をいただける体制だと時期に関係なく応募できるのでありがたいと思いました。		

成果の概要

京都大学消化管外科
肥田侯矢

<学術集会の概要>

学会名：第 116 回米国結腸直腸外科学会議 (ASCRS2015)

主催者：米国結腸直腸外科学会

場所：ボストン ハインズコンベンションセンター

会期：2015 年 5 月 30 日 - 6 月 3 日

次回開催予定 ロスアンジェルス 2016 年

米国結腸直腸外科学会議はアメリカ・カナダ他 50 か国以上、1500 人以上の大腸外科医の参加する歴史ある学会の一つであり、大腸癌に対する治療、炎症性腸疾患に対する治療、肛門疾患に対する治療をメインに議論を行ってきた。今回筆者以外にも複数人が京都大学からこの学会に参加し、発表、討議を行ってきた。大腸癌の領域は約 20 年前に歴史の転換があり腹腔鏡手術が導入された。この革命的な道具の導入により大腸癌手術の質は飛躍的に上昇し、癌の根治とともに機能温存が見込まれるようになった。腹腔鏡関連器具の進歩に加えて、近年はロボット手術がこの分野にも導入され、米国でもその広がりを見せていることがこの会議でも確認された。これに加えて今年の本会議で目立ってきたのは、本学の長谷川も報告を行った経陰陰的直腸間膜全切除 (TaTME) である。従来の腹腔鏡下直腸癌手術のオプションとして、腹腔側だけでなく会陰側からもアプローチすることで、肥満患者など腹腔側からは手技が困難な骨盤の最深部分の手術を安全かつ容易に行うというものである。日本でもこの手技が徐々に広がってきており、腹腔鏡下直腸癌手術のオプションの一つとして今後脚光を浴びることは疑いない。ビデオ発表に関しては、海外では肥満体型の患者が多いこともあるが、全体としては日本の学会での発表の方が質は高いと感じられ、今後も日本がリードしていくべき領域であると実感した。

<発表の概要>

腹腔鏡下直腸癌手術 局所再発関連因子の探索

A new prediction model for local recurrence after curative rectal cancer surgery

【背景・目的】腹腔鏡下直腸癌手術が普及してきたが、局所再発は治療に難渋することもあり、日本と韓国の共同研究として直腸癌の局所再発因子を探索し、再発リスク評価を行うこととした。

【方法】日本と韓国の 2 施設で 2005 年から 2010 年に行われた Stage I-III の直腸癌症例の局所再発に関連する因子を探索した。統計解析は単変量解析 (log-rank 検定) で抽出した因子を用いて cox 比例ハザードモデルにて多変量解析を行った。

【結果】適格 1190 例の解析を行い、多変量解析の結果、腫瘍位置 (肛門縁から 5cm 以上、HR0.34 95%CI 0.14-0.80)、CEA (5 以上 HR2.6 95%CI 1.4-4.9)、術式 (APR

HR3.24 95%CI 1.2-8.9)、T3以深 (HR5.16 95%CI 1.8-21.6)、リンパ節転移陽性 (HR4.4 95%CI 2.3-8.8)、低分化度 (HR9.8 95%CI 3.6-22.6)、術後合併症 (HR2.9 95%CI 1.5-5.5) が独立した局所再発関連因子であった。これらの項目を点数化し、低分化度を2点、それ以外を1点として合計すると低リスク群 (0-3点) の2年局所再発率は1.4%、中リスク群 (4点) は11.5%、高リスク群 (5点以上) は66.5%と高い分別能を示した。

【結語】直腸癌の局所再発リスク評価を行い、合併症などが再発のリスクになっていることがわかった。この再発リスク分類は、直腸癌の局所再発を高精度に予測できる可能性があり、直腸癌の治療戦略において有用なツールとなりうる。

この発表においては、韓国との共同研究でもあり、韓国の研究者と協力してデータ集積、データ解析を行っている。発表は電子ポスター形式で行われ、海外の研究者らと discussion を行った。研究に関しては倫理審査委員会の承認も得られており、今後、この予測ツールを用いて、新たな集団での評価を行うとともに、論文報告をしていく方針である。大腸癌に対する腹腔鏡下手術は現在も発展を続けており、治療成績は向上している。日本における開腹手術と腹腔鏡下手術のランダム化比較試験である JCOG0404 では StageII-III の大腸癌に対する腹腔鏡下手術、開腹手術いずれも90%以上の5年生存率という驚異的な結果におわったが、今後日本も大腸癌治療の重要な先導役になるべきと考えられ、海外学会の動向も注意深く follow していく必要があると感じられた。

<謝辞>

最後になりますが、今回の発表に際しまして多大なご助成をいただき、京都大学教育振興財団には深く感謝しております。今後貴財団のさらなる発展を祈念しております。